

## 4) 講堂

御本尊

夏堂：阿弥陀如来坐像

冬堂：十一面観音立像

講堂は僧侶が説教・講話などを行う建物です。

入母屋造・鋳葺・単層の建物です。

内部は西側の「夏堂（げどう）」、東側の「冬堂（とうどう）」に分かれた構造となっています。

夏堂の御本尊の阿弥陀如来坐像は、中門の金剛力士像と同じ、松久朋琳・宗琳の作品で、高さが約6mあり、「昭和の丈六（じょうろく）仏」とも呼ばれています。



阿弥陀如来は死後の極楽往生を約束する仏、十一面観音は人々を現生の苦しみから救う仏ということで、現世から来世まで、人々をお導きいただくようにという願いが込められています。

内壁には、日本画家・郷倉千靱（ごうくらせんじん）により、仏教東漸（とうぜん）が描かれています。

正面扉は閉まっていますが、左右から入堂できます。

**仏教東漸とは：**

東漸とは、物事がしだいに東に広がり、伝わることです。

インドで生まれた仏教が、東南アジアや中国、朝鮮を経て、日本に伝播する様子が、「仏教東漸」です。

**丈六とは：**

仏像の高さの基準の1つで、1丈6尺（約4.85m）のことを指します。これは、釈迦の身長が1丈6尺だったことに由来しています。

四天王寺講堂の阿弥陀如来坐像については、像高が約6mもある上、そもそも坐像なので、丈六像とするのであれば半分の高さで造るのが普通で、一般的な意味での丈六仏（像）ではありませんが、「丈六くらいある大きな像」という意味なのでしょう。

冬堂には現世の人々の悩みや苦しみを救う「十一面観世音菩薩立像」（佐川定慶作）が設置されています。

四天王寺は浄土信仰発祥の地でもあり、世間からは「大阪の仏壇」とも呼ばれ親しまれております。